



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 2869号 2016.2.16 発行

### 障害者の貧困率は健常者の倍 4人に1人以上 慶大教授ら初算出

東京新聞 2016年2月16日

#### 障害者と障害のない人の貧困率

	障害者	障害のない人
20~39歳	28.8%	13.8%
40~49歳	26.7%	13.4%
50~64歳	27.5%	14.6%

生活に苦しむ人の割合を示す「相対的貧困率」が障害者では25%を超え、四人に一人以上が貧困状態にあることが山田篤裕・慶応大教授らの研究グループの調査で分かった。障害のない人の数値に比べほぼ二倍だった。

障害者が働ける場が少なく、賃金も安いほか、障害年金など公的な現金給付の水準が先進国の中で低いことが主な要因だ。

政府は全人口や十八歳未満の子どもを対象にした貧困率は計算しているが、研究グループによると、障害者に限った数値の算出は初めてという。

厚生労働省の科学研究費による調査で、同省が貧困率の計算に使っている国民生活基礎調査（二〇一三年実施）のデータを分析した。

「障害や身体機能の低下などで、手助けや見守りを必要としていますか」という調査票の質問に「必要」と答えた人を対象に、年代別に貧困率を計算した結果、二十~三十九歳では28.8%、四十~四十九歳は26.7%、五十~六十四歳は27.5%だった。

障害のない人では、それぞれの年代で13.8%、13.4%、14.6%と半分程度にとどまる。厚労省が公表している全人口（障害者を含む）の貧困率は16.1%。

研究グループによると、日本の障害者の貧困率は先進国の中で高い部類に入り、障害のない人との格差も大きい。

山田教授は「日本の障害者の貧困が深刻であることが分かった。貧困からの脱出には就労が有効であることがうかがえ、本人や家族の就労を後押しする政策がもっと必要だ」としている。

相対的貧困率 全人口のうち、生活の苦しい人がどれだけいるかを示す指標。1人当たりの可処分所得を高い人から順に並べ、真ん中となる人の所得額（中央値）の半分に満たない人が全体に占める割合で表す。可処分所得は収入から税金や社会保険料などを除き、公的年金などを合計した金額。世帯の可処分所得と人数を基に計算する。資産は考慮しない。

### 「農福連携」広がる 農家は人手確保、障害者の自立に道 東京新聞 2016年2月16日

障害のある人が農業の現場で働く例が急増している。高齢化で働き手が不足するなか、農家は障害者を貴重な労働力として歓迎、障害者にとっては安定収入を得られ経済的自立を目指すことができる。「農福連携」という新たな取り組みに、国や自治体も支援に乗り出している。（白山泉、写真も）

見渡す限り雪原が広がる北海道・十勝平野。株式会社「九神（きゅうじん）ファームめむろ」（芽室町）の調理場では、白衣に身を包んだ知的障害者らが、秋に収穫したジャガイモの皮むきやパック詰め作業をしていた。

二〇一三年に設立されたファームでは、約二十人の障害者が働く。三ヘクタールの農地でジャガイモなどを栽培しポテトサラダやコロッケの材料に加工。総菜メーカーに販売する。管理者の古御堂（ふるみどう）由香さん（40）は「できる仕事を精いっぱいやってもらっている。一人欠けても作業は進まない」と語る。



「誰もが働いて生きていける場所」を目指すファームの月給は約十一万円。障害者施設の平均約七万円を上回り、約六万円の障害者年金と合わせれば経済的に自立できる水準だ。

精神障害者や知的障害者らが農業分野で働く「農福連携」は、〇八年のリーマン・ショック後に注目されるようになった。製造業の海外移転が進み、下請け作業をしていた障害者の職

場は減少。一方で農業現場では人手は不足している。

ニーズが合ったことで両者の連携は加速。農林漁業に就職する障害者は十年前の五倍に増え、一四年度には二千八百七十人となった。

発達障害など精神的な障害のある人のなかには、自然とふれあう農作業を続けるうちに、心の病などが改善。給付金の受給をやめ、健常者として新たに歩み始める人なども出ている。



「農福連携」を進めるため、厚生労働省や農林水産省のほか、長野県や香川県も障害者施設と農家を仲介する事業などを実施。官民が手を合わせ、二〇年の東京五輪・パラリンピックで障害者が手掛けた農産物や加工品の販売計画も進む。

白石さん（右）と言葉を交わしながら、収穫作業する障害者の男性＝東京都練馬区の白石農園で

◆「土とふれ合い、やりがい」農地確保、収益拡大が課題

### 大が課題

障害者の生きがいとなる取り組みが増えている「農福連携」。一方で農地の確保や収益の維持が大きな課題となっている。

東京都練馬区で露地野菜を生産する白石農園。四十代の男性は会社員時代に統合失調症を患い、八年前から働いている。「土のひんやりした感触が気持ちが良く、育った野菜を収穫するのもやりがいがある」

家族経営の白石農園にとって、高齢化するパートに代わる人材としてありがたい存在だ。経営する白石好孝さん（61）は「人との摩擦がストレスになって心を病んだ人は、自然の中で体を動かす作業が合っているようだ」と語る。

しかし、障害者を雇うことにちゅうちょする農家も多い。障害者施設が新規参入しようとする時の高い壁は、農地や農業技術の確保だ。JA共済総合研究所の浜田健司研究員は「各地の農協が主体的に動き始めれば農福連携はさらに広がるはずだ」と指摘する。

またビジネスとして成立することも不可欠だ。「経営感覚がある人がいなければ、賃金を払い続けることができない」とNPO法人「多摩草むらの会」（多摩市）の風間美代子代表理事（70）は語る。

「草むらの会」では、精神障害者ら約七十人が六百種類以上の野菜などを栽培。ジャムや漬物の加工に取り組み、道の駅や居酒屋に出荷する。「『障害者が作ったもの』というお情けではなく、どこに出しても通用するものを作り、販路を広げる努力がいる」とする。

知的障害者にわいせつ疑いで支援施設職員の44歳男逮捕 岐阜県警

産経新聞 2016年2月16日

岐阜県警は15日、知的障害がある少女にわいせつな行為をしたとして、準強制わいせつの疑いで、同県可児市今渡、障害者支援施設職員の井上純容疑者（44）を逮捕した。可児署によると「無理やりではなかった」と容疑を否認している。

逮捕容疑は昨年9月中旬、県内に住む10代の少女が正常な判断ができない状態にあると知りながら、自宅でわいせつな行為をしたとしている。

可児署によると、井上容疑者と少女は面識があり、少女が両親に被害を訴えた。9月に両親が相談に訪れ、同署が調べていた。

### 川崎市老人ホーム転落死 23歳の元職員を逮捕



NHK ニュース 2016年2月16日  
おとし川崎市の老人ホームで80代と90代の入所者3人が相次いでベランダから転落して死亡した事件で、警察はこのうち87歳の男性をベランダから落としたとして、当時職員だった23歳の男を殺人の疑いで逮捕しました。男は「男性を投げ落としたのは間違いない」などと容疑を認めているということです。

逮捕されたのは、転落死が起きた施設の元職員で、横浜市に住む今井隼人容疑

者（23）です。川崎市幸区の有料老人ホーム「Sアミーユ川崎幸町」では、おとし11月に87歳の男性が4階のベランダから、翌月の12月には86歳と96歳の女性2人がそれぞれ4階と6階のベランダから相次いで転落して死亡しました。

警察は2か月の間に同じ施設で転落死が3件相次いだことや、高齢の3人がベランダの手すりを自力で乗り越えるのは難しいことなどから事件の疑いもあるとみて捜査していました。

その結果、3人が転落した時間帯に勤務していたのは夜勤の今井容疑者だけと分かり、事情を聞いたところ、最初に死亡した丑澤民雄さん（87）をベランダから落としたことを認めたことなどから、警察は15日夜遅く、今井容疑者を殺人の疑いで逮捕しました。

調べに対して、「ベランダから投げ落としたのは間違いない」などと供述し、「殺害するつもりだった」という趣旨の供述をしているということです。

警察によりますと、今井容疑者は丑澤さんが転落して死亡した際、第1発見者として「庭に男性が倒れている」と施設の関係者に伝えていました。

捜査関係者によりますと、今井容疑者はほかの2人についても殺害を認めているということで、警察は連続殺人の疑いがあるとみて事件のいきさつや動機などを詳しく調べることにしています。

### 逮捕前「何も知らない」

去年9月に取材した際、今井容疑者は「当時、自分が当直していたことは事実で、自分が疑われているのは分かっているが、何も知らない」などと述べ、事件への関与を否定していました。また、3人が死亡したことについて「本当に残念ですし、介護職員として、当時、自分が関わっていたので非常に悲しいです」などと話していました。

### バス事故の運転手 1か月前の適性検査で最低評価 NHK ニュース 2016年2月15日

長野県軽井沢町のバス事故で死亡した運転手が、事故の1か月前、前の会社にいたときに受けた運転適性検査で、5段階の評価で最も低い「特に注意」と診断されていたことが



分かりました。運転手はその後、入社したバス会社で適性検査を受けないまま乗務して、今回の事故を起こしており、国土交通省は全国のバス会社に検査の徹底を指示しました。

今回の事故で、バスを運転していた土屋廣運転手（65）は、車体の制御ができないまま、事故の直前に時速96キロで走行して道路下に転落したとみられ、乗客乗員15人が死亡しました。

その後の取材で、土屋運転手が事故のおよそ1か月前の去年12月10日、前のバス会社に在籍していたときに、任意の運転適性検査を受けていたことが分かり、NHKはその診断結果を入手しました。

それによりますと、土屋運転手は9つの検査項目のうち、状況変化への反応をみる「正確さ」や「速さ」など3つの項目で、5段階で最も低い「1」と評価されていたことが分かりました。

コメントでは「誤りの反応が多くありました。突発的な出来事に対する処置を間違いやすい傾向がある」などと警告されています。

また、注意力という検査項目でも「1」と評価され、「全体的に注意力が散漫」だと指摘されています。

結局、9つの検査項目のうち4項目が「1」で、総合的な評価でも5段階で最低の「特に注意」と診断されていました。

検査は任意で行われたことや、直後に土屋運転手が会社を辞めたことなどから、診断結果は会社や本人に手渡されていなかったということです。

土屋運転手はその後、事故を起こしたバス会社に入社し、法令で義務づけられた適性検査を受けないまま乗務して、今回の事故を起こしており、国土交通省は全国のバス会社に検査の徹底を指示しました。

### 運転適性検査と運転手の診断詳細

運転適性検査は、運転手の適性を総合的に判断するもので、国土交通省がバス会社に対して、国が認定した検査を運転手に受診させることを法令で義務づけています。

適性検査では、運転シミュレーターや測定機器を使うなどして、性格の特性や状況把握の正確さや危険を察知した際の判断、それに注意力や重複した作業を正確に素早くできるかなどを測定するほか、専門家による面談も行います。そのうえで国土交通省はバス会社に対して、診断結果に基づいて運転手に適切に指導するよう求めています。

適性検査の対象となっているのは、事故を起こした運転手のほか、新たに雇った運転手や65歳以上の運転手です。

土屋運転手の場合、去年12月に事故を起こした会社に入社しましたが、会社側は法令で義務づけられた適性検査を受けさせていませんでした。

また、最近3年以内に受診していた場合、適性検査は免除されますが、国土交通省によりますと、土屋運転手は入社前に任意で受けた検査を除いて、3年以内に検査を受けた記録は見つかっていないということです。

土屋運転手が今回受けていた運転適性検査は、速度感覚と焦りの度合い、状況変化に対する反応、注意力の持続性などの3種類のテストを行い、合わせて9つの項目について5段階で評価しています。

その結果、土屋運転手は、状況変化に対する反応を見るテストでは、「正確さ」「速さ」「むら」という3つの項目とも、5段階で最も低い「1」と評価されています。コメントでは「『特に注意』です。誤りの反応が多くありました。よく確かめないうで行動し、あわてて急ブレーキや急ハンドルを使うことはありませんか。突発的な出来ごとに対する処置を



間違いやすい傾向があるので、危険な場面での一か八かの行動は絶対に避けてください。また、反応が遅れがちです。けっして無理をせず控え目な運転をすることが大切です」と警告されています。

また、注意力の持続性などに関するテストでは、どれだけ正確に障害物を通過したかを調べる項目で「1」と評価され、「全体的に注意力が散漫」だと指摘されています。

結局、9つの検査項目のうち4つの項目が「1」で、総合的な評価は5段階で最低の「特に注意」と診断されています。そのうえで、「毎年1時間に約1人が自動車事故で死亡しており、その背後には肉親や関係者などさらに多くの人が苦しんでいるのも事実で、いつ自分自身がその当事者になるかもしれません」と指摘されています。

### **運転手の運転技能は**

バスを運転していた土屋運転手は、去年12月に事故を起こしたバス会社に入社したあと、大型バスを運転する研修は1度受けただけで、4回目の業務で今回の事故を起こしました。

去年12月まで5年間在籍していた前のバス会社では、比較的小型のバスの運転を担当し、冠婚葬祭の送迎など昼間の近距離の運転が中心で、土屋運転手は「大型バスの運転はしない」と話していたということです。

土屋運転手が入社後、一緒に大型バスに乗ったという同僚はNHKの取材に対し、「大型バスもある程度は運転できたが、ハンドルさばきに疑問があったり、進路変更が少し遅れたりすることがあった」と証言していました。

また、会社側も記者会見で、土屋運転手に大型バスの運転に慣れさせるために、一般道ではなく比較的運転しやすい高速道路の運転を担当させていたと話していました。さらに、会社の幹部も「採用担当者は土屋運転手が大型バスの運転に不慣れだという認識があった。スキーバスの仕事をやらせるかどうか、担当者の判断に任せきりだった会社の責任で、申し訳なく思っている」と話していました。

今回の事故では、現場直前の監視カメラに、土屋運転手が運転するバスがセンターラインをはみ出しながら、かなりのスピードで走行する様子が映っていて、事故直前には時速96キロに達していたことが分かっています。

また、警察が事故後に行った車体の検証では、ギアがエンジnbrakeが効かないニュートラルの状態になっていました。

警察は、大型バスの運転に不慣れな土屋運転手がバスを制御できないまま道路下に転落したとみて調べています。

事故を起こした、東京・羽村市にあるバス会社「イーエスピー」の高橋美作社長は、事故から1か月になるのを前にNHKのインタビューに応じました。

この中で高橋社長は、「事故の重大さと責任を痛感している。お亡くなりになられた方、けがをされた方、ご遺族やご家族などに対し、本当に申し訳ないという気持ちでいっぱいです。賠償を含めて、一生をかけて償いを進めていきたい」と改めて謝罪しました。

そのうえで、事故原因について、「第一は弊社の責任だが、それだけで過ぎていっていいのかという思いもある。運転手や会社の管理体制、それに旅行会社とのつながりなどを考えていくと、いろいろなことが複合的に混ざり合い、事故が起きたのかもしれない。こういうことを全体的に考えて、不幸な事故が二度と起きないように、会社としてできることは何でもしていきたい」と述べました。

### **専門家「検査をきちんとさせる仕組みを」**

交通機関の安全対策に詳しい関西大学の安部誠治教授は、「この診断結果を見るかぎり、運転特性にかなり問題があり、こういう人を運転手として運転させていいのかというほどの結果だ。極めて重要な適性検査を事業者にきちんとやらせる仕組み、やらない場合は厳しい処分を下すという制度にしていかなければならない」と指摘しました。

また、「バス業界はかなり深刻な人手不足で、高齢の運転手が増えているが、会社は仕事を受けるために、検査で多少問題があっても乗務させている現実がある。そういう状況に

メスを入れる制度設計が必要だ」と述べました。

そのうえで安部教授は、「適性検査と健康診断の結果のデータを公的な第三者機関に蓄積して、新しく運転手を雇い入れる会社があるデータを見て判断できるような仕組みが構築できれば、安全性は高まる」と提言しています。

## 梅毒感染が拡大、女性は倍増 妊娠中なら胎児に悪影響も 富岡史穂

朝日新聞 2016年2月16日

### 梅毒患者数の推移と梅毒の特徴

梅毒に感染する人が近年、急増している。特に女性は、2015年では前年の2倍に増えた。妊娠と時期が重なれば、赤ちゃんに感染して先天性の梅毒になる恐れもある。厚生労働省は予防を呼びかけている。

梅毒は、「梅毒トレポネーマ」という細菌による感染症で、主に性行為で広がる。性器や唇などにしこり、ただれが起き、進行すると全身に赤い発疹ができる。重症化すると、まひなどを起こすこともある。

国立感染症研究所（感染研）のデータによると、日本の感染者は1948年には22万人近かったのが、治療薬の開発などで激減。90年代以降は1千人を下回り、ほぼ横ばいが続いていた。しかし、2010年から増加傾向に転じ、去年は2600人を超えた。

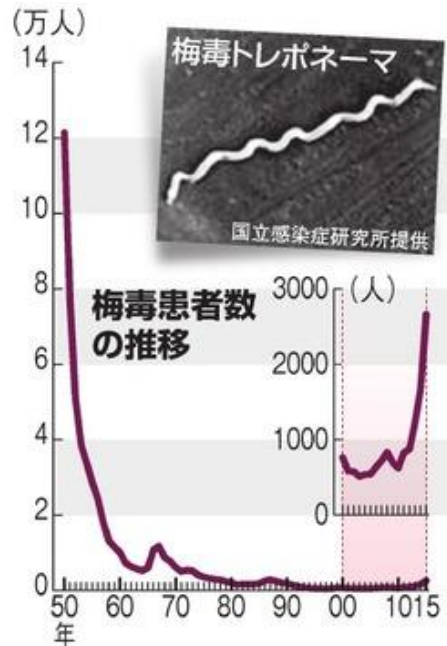
中でも女性の増加が目立つ。15年10月時点では前年同期比の2倍の574人にのぼった。このうち76%を15～35歳が占めている。

若い女性に感染が増えると、妊娠している場合、胎盤を経由した胎児への感染が心配される。流産や死産を招く危険に加え、生まれた赤ちゃんが先天性の梅毒になる可能性もある。

先天梅毒の赤ちゃんは、神経系の障害や肝臓の病気を持っていることが多い。東京慈恵会医科大学教授の石地尚興（たかおき）さん（皮膚科）は「発見の時期にもよるが、赤ちゃんの梅毒の治療は難しい」と話す。

厚労省が標準とする妊婦健診では、妊娠初期（13週まで）に1回、梅毒を含めた性感染症の有無を調べることになっている。その時点で感染がわかれば、妊婦が薬を飲むことで、赤ちゃんとともに完治できる。だが、妊娠中期（14週）以降に性交渉で感染することもある。妊婦が自身で検査を受けない限り、赤ちゃんの感染に気づくのは困難だ。

また、経済的な事情などで妊婦健診を一度も受けない女性もいる。厚労省は「感染リスクを知ってもらうことが最大の予防策」として、女性を意識したピンクのポスターを新たに作った。パートナーと一緒に検査を受けることや、コンドームを適切に使うことなどを呼びかけている。



### 梅毒の特徴

◎ 主な症状	第1期	細菌が入り込んだ部分のしこり、ただれ
	第2期	皮膚の赤い斑点（パラ疹）や発疹
	重症化	まひなどが出ることも
◎ 主な感染経路		

- 性器や口、肛門など粘膜の接触
- 症状がない潜伏期間も感染する



### ショールで“室津らしさ”発信 たつので作品展

神戸新聞 2016年2月16日

兵庫県たつの市御津町室津地区の風景などの写真をプリントしたショールの作品展「室津を身にまとう」が16日から、室津海駅館と室津民俗館（いずれも同市同町室津）で始まる。同市の福祉事業所を利用する障害者と神戸の大学生、地元住民が町を歩いて見つけた“室津らしさ”を発信する。3月13日まで。

同市の福祉事業所「NPO法人えびす」と神戸芸術工科大（神戸市西区）が連携し2013年から取り組むアートプロジェクト。室津を舞台にするのは昨年につき2回目で、今年新たに地元住民も参加した。

#### 室津の魅力を表現したショール作品＝たつの市、室津海駅館

参加者で12組のペアをつくり町を歩いて写真を撮影。縦約70センチ、幅約160センチのショールに印刷した。漁港のリヤカー、賀茂神社のしめ縄、魚をモチーフにした室津小学校の校章…。見慣れた風景を新たな視点で捉え直し、地域の魅力を一枚一枚の布に凝縮させた。

また、同大の谷口文保准教授（44）が昨夏、研究で訪れたメキシコ・ハラパ市で、地元大学生らに制作してもらった19点も並ぶ。谷口准教授は「たつので生まれた表現が人のつながりを生み、海を越えた交流につながれば」と期待を込める。

両会場とも月曜休館、高校生以上200円、小中学生100円（両会場の共通券あり）。室津海駅館TEL079・324・0595（松本茂祥）



### 朝食抜くと脳出血リスク上昇 13年間の追跡調査 NHK ニュース 2016年2月15日



朝食を食べるのが週に2回以下の方は、毎日食べる人に比べて脳出血になるリスクが36%高まるという研究成果を、国立がん研究センターなどのグループが発表しました。

国立がん研究センターと大阪大学などのグループは、岩手県や長野県など全国8つの県に住む45歳から74歳までの8万3000人を13年間にわたって追跡し健康状態を調べました。

その結果、朝食を食べるのが週に2回以下の人は、毎日食べる人に比べて脳出血を発症するリスクが36%高かったということです。脳出血は高血圧の人がなりやすいことが分かっていますが、朝食を食べないと、空腹によるストレスなどから血圧が上がることで報告されています。このためグループでは、朝食を抜いたために、朝血圧が上がり脳出血のリスクが高まった可能性があるとしています。

この研究を行った大阪大学の磯博康教授は「中年以降になっても、朝食を抜くことが脳出血のリスクを高めるなど健康に悪い影響を及ぼす可能性がある。できるだけ朝何か口に入れるよう心がけてほしい」と話しています。

### 脳の構造 5億年以上前に形成か

NHK ニュース 2016年2月16日

進化の過程で、およそ5億年前に人類などの祖先と分かれたと考えられている原始的な特徴を持つ生物の「胚」に、大脳や小脳のもととなる部分があることを理化学研究所など

のグループが突き止めました。研究グループは、人類などの脳の基本的な構造が5億年以上前に形づくられていたことを示す成果だとしています。

神戸市にある理化学研究所の倉谷滋主任研究員と兵庫医科大学などのグループは、進化の過程で脳がどのように発達したかを探るため、深海に住む原始的な特徴を持つ脊椎動物のヌタウナギとヤツメウナギについて、それぞれの受精卵が成長した「胚」を詳しく分析しました。

その結果、大脳や小脳のもととなる部分があることを突き止めました。これらの生物の祖先は、およそ5億年前、人類などの祖先と分かれたと考えられていて、研究グループは、人類などの脳の基本的な構造が5億年以上前に形づくられていたことを示す成果だとしています。

倉谷主任研究員は、「私たちの脳の基本構造が進化の極めて早い段階でできていたことが分かった。進化の過程を解明するうえで貴重な成果だ」と話しています。この研究成果は、イギリスの科学雑誌「ネイチャー」に掲載されます。

### 100円乗り放題 葛城市が新バス運行開始 産経新聞 2016年2月16日

葛城市は15日、4系統で運行されていたコミュニティーバスを統合、再編し「ぐるっとかつらぎ」として運行を始めた。32人乗りの小型バス「れんかちゃんバス」と、12人乗りのワゴン車「けはや号」の2種類で、1日100円で乗り放題という破格の運賃設定。市外の大和高田市立病院前や葛城市内のスーパー近くにも停留所が設けられ、利便性も向上した。

同市内ではこれまで、公共施設を結ぶバスや福祉施設への送迎用などがあったが、路線が異なるため連絡が悪いなどの課題が指摘されていた。「ぐるっとかつらぎ」はこれを統合し、主に幹線道路を巡回する「環状線ルート」（内回りと外回り各1日6便）と、これに接続する支線の「ミニバスルート」（6コース各1日4便）を設定。小学生と70歳以上の運賃は50円、未就学児と障害者は無料とした。

小型バスはノンステップバス2台で、ワゴン車4台と合わせた計6台を市が購入。運行は奈良交通に業務委託し、年間の運行費用は約8千万円の見込み。「れんかちゃんバス」には市のマスコットキャラ「蓮花ちゃん」が、「けはや号」には力士のイラストがあしらわれている。年末年始を除く毎日運行される。問い合わせは、奈良交通葛城営業所（電）0745・63・2501。

### 障害者スポーツの魅力に迫る番組、BS日テレでスタート 産経新聞 2016年2月16日

パラアスリート（障害者スポーツ選手）の努力や人間性、競技の奥深さに迫るドキュメンタリー番組「ストロングポイント」（日曜午後5時）が21日、BS日テレでスタートする。初回ゲストは、車いすマラソンの世界大会を何度も制した副島正純選手で、妻との二人三脚の合宿に密着する。第2回（28日放送）のゲストは、ウィルチェアラグビー（車いすラグビー）の池崎大輔選手。ナレーションを務めるお笑いタレントの上田晋也は「番組を通して、障害者スポーツには健常者のスポーツとは違った競技の魅力や楽しさがあることを知っていただきたい」とコメントしている。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も



大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行